

題目 旧制中学校教員社会における学歴

指導教官 山口健二

発表者 勝田耕介

題目設定の理由

戦前の中学校教員社会は高等師範学校卒業者、帝国大学卒業者、専門学校卒業者、文検合格者など、さまざまな学歴を持つものによって構成されていた。それは当時、中学校教員養成の中心的機関になるはずであった高等師範学校が、今日の教員養成大学ほど多くの中学校教員を輩出しておらず、量的な供給を他の機関に頼っていたからである。そのように中学校教員がさまざまな学歴を持っていたことから、同じ中学校教員であったとしても違う学歴を持っていた教員同士は違う社会集団に属していた。そこで、学歴ごとに違う社会集団を形成していた旧制中学校教員社会の構造を明らかにしていくことにより、当時の中学校教員の学歴意識の解明に関して考えを深めることができると考え、本題目を設定した。

論文構成

第1章 旧制中等教員資格

第1節 戦前の高等教育機会

第2節 資格取得の方法

第2章 旧制中等教員を輩出した主な機関

第1節 高等師範学校

第2節 帝国大学

第3節 結果と考察

第3章 旧制中学校教員の学歴

第1節 旧制中学校教員の社会的地位と給与

第2節 旧制中学校教員の学歴構成と変遷

第3節 旧制中学校における高等師範学校閥と帝国大学閥

第4章 制度の作る「心性」～旧制中学校教員の学歴意識～

第1節 旧制中学校教員社会の学閥構造

第2節 旧制中学校教員の意識

おわりに

論文の内容

第1章 旧制中等教員資格

戦前の中等教員資格は主に明治17年の「中学校師範学校免許規定」や明治33年の「教員免許令」といった法令により運用されていた。それらによると中等教員資格を得るには主に「官立教員養成機関卒業」、「文部大臣の指定したる官立学校（指定学校）卒業」、「文部大臣の許可を受けたる学校（許可学校）卒業」、「試験検定（文検）合格」の4つの方法があった。「試験検定合格」以外の3つはいずれも高等教育機関を卒業することであったのだが、当時の高等教育機関に進学するには3つの条件が必要であるとされていた。

第1の条件は能力的条件で、いわゆる「学力」であった。当時、各段階の学校にはいくつもの入学試験や卒業試験が設けられており、それらに勝ち残らなければならなかった。第2の条件は経済的条件であり、官費制度が廃止されていった高等教育機関では、たとえ官立であっても高額の授業料やほとんどの高等教育機関が集中していた東京で生活するための「遊学」費用が必要であり、当時の一般的な階層にとってはかなり高額であったと言える。第3の条件は社会的条件であり、親が官公吏など近代的な教育を必要とする職業に従事していたかということである。当時は自家の職業が農業である者の高等教育機関への進学率は著しく低く、農業を営む親たちはある程度の読み書き以上の教育は必要ないと考えていた。このため、たとえ能力的条件や経済的条件をクリアしていたとしても、この社会的条件によって高等教育機関への進学はかなり制限されていた。

上記のような条件をクリアして高等教育機関に進学した者は中等教員免許を得ることがで

きたのであるが、高等教育学歴を持たない者は文検に合格することによって中等教員免許を得ることができた。

第2章 旧制中等教員を輩出した主な機関

ここでは、旧制中等教員を輩出した機関として一般教員、校長ともに多く輩出した高等師範学校と一般教員ではマジョリティーではなかったものの、多くの校長を輩出した帝国大学の2つが重要であると考えた。

高等師範学校では、教授法や心理学などを重視するプロフェッショナリズムの教育理念に基づいた教育がなされており、卒業後は義務として何年間か中等教員にならなければならなかった。また授業料を徴収してはおらず、経済的条件がかなり引き下げられていた。それにもかかわらず生活が困難とする者が多く、中等教員になった後もさらに上位の職に就こうとする者はほとんどいなかった。このことにより高等師範学校卒業者はしばしば「保守的」であると帝国大学卒業者から批判を受けている。

帝国大学での教育は、中等教員は専門の教科目に精通していればよいという「学者即教師」の教職観に基づいてアカデミズムの教育理念で行われていた。帝国大学卒業者は高等師範学校卒業者と違い、中等教員になった者もいたが、義務ではなかった。また初職が中等教員であっても、自家が裕福である場合が多かった帝国大学卒業者は職を辞し、さらに上位の職に就こうとする者が多かった。このことから少なくとも高等師範学校卒業者よりは「変革的」であったと見られていた。

卒業後の服務義務の有無や自家が裕福かどうかという点で両者の違いは大きく、それにとまって両者の性質も大きく違ったものになっていった。

第3章 旧制中学校教員の学歴

旧制中学校教員社会では学歴によって、社会的地位や給与が大きく違ってきていた。社会的地位、給与ともに最も高いのは帝国大学卒業者で、次に高等師範学校卒業者、次にその他・文検合格者といった順番である。高等師範学校卒業者が学閥を形成し、多くの校長職を勝ち取るようとしていたのは、この格差を埋めるためでもあった。当時の校長は権限が強く、学校内の給与や人事のすべてがまかされていた。しかし、残っている多くの回想録には高等師範学校閥は強固であり、その保守性に対して批判的なものが多い。それに対して、帝国大学卒業者は理想的な教師として扱われている場合も多い。

経済的理由から他の職業へ移動することが現実に難しかった高等師範学校卒業者が中学校教員社会の中で自分たちの地位を向上するには、学閥を形成し、帝国大学卒業者に対抗するしか方法がなかったのである。

第4章 制度の作る「心性」～旧制中学校教員の学歴意識～

帝国大学卒業者は高等師範学校卒業者に比べて学歴意識は低かったものと思われる。それは元々、高等師範学校卒業者より社会的地位、給与ともに高いからである。しかし、高等師範学校卒業者たちは中学校教員社会に入った時、大きく変化すると考えられる。同じ中学校教員であるのにもかかわらず、社会的地位や給与が圧倒的に帝国大学卒業者の方が高いのを目の当たりにして学歴意識に変化が起きるのである。これはつまり、帝国大学の卒業者の方が上位であると決めている「制度」が学歴意識に変化をもたらすと考えることができる。

学歴による処遇の差が、制度の中に埋め込まれている時、人は好むと好まざるとにかかわらず、自らの学歴に敏感にならざるを得ない。中学校教員（特に高等師範学校卒業者）はその顕著な例であろう。

主要参考文献

天野郁夫 1993, 『学歴の社会史 - 教育と日本の近代』新潮社

牧昌見 1971, 『日本教員資格制度史研究』風間書房

山田浩之 2002, 『教師の歴史社会学 - 戦前における中等教員社会の改造構造』晃洋書房